

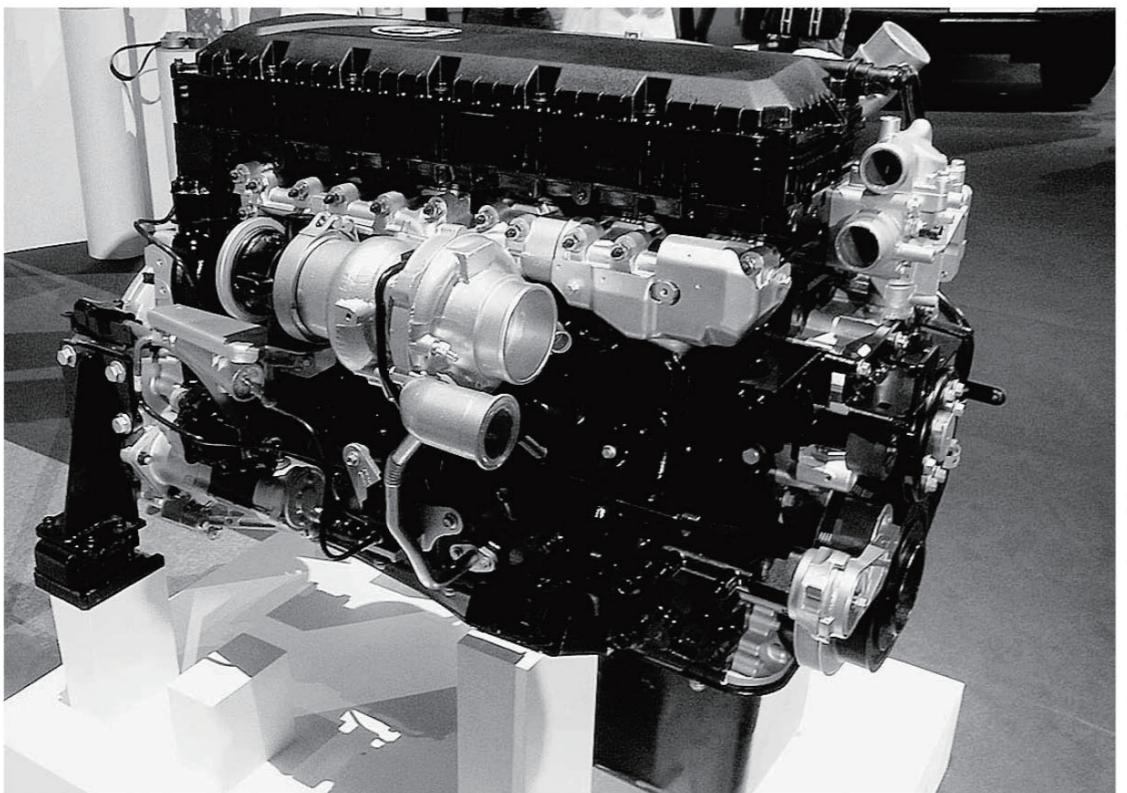
TBK

ターボ向け部品の内製化率アップ

コンプレッサーハウジングも量産開始

収益基盤の安定化図る

大型車向けのブレーキやエンジン部品などを手がけるTBKは、ターボチャージャー（過給器）向け部品の内製化率を高める。コンプレッサーハウジングの量産を2022年末にも開始し、ベアリングハウジング、タービンと合わせて、ターボの3主要部品を生産できる体制を整える。自動車市場では電動化が進展しているが、同社が主力とする大型車向けではエンジンの小型化や低燃費化が可能なターボのニーズが底堅く推移しそう。ターボを含め、エンジン向け部品の内製比率を高めることで収益基盤の安定につなげる。



商用車を中心にターボチャージャーのニーズは底堅いとみられる
(写真はイメージ)

まず、自動車向けポンプ類やエンジン部品を製造しているタイ子会社のTBKKで北米向けにコンプレッサーハウ

ジングを生産する。まずは月産4万台の計画で、受注の拡大に合わせて生産数を順次、増やす。コンプレッサーハウ

ジングは形状が複雑なため、同社が持つアルミダイカスト設備では効率良く生産できない。このため、複雑な形状にも対応できるアルミ重力鋳造「GDC」に対応した生産設備を導入した。今後、ターボの需要拡大が見込まれる米国や中国などの工場にもGDCの導入を検討する。

調査会社のグローバルインフォメーション（小野悟社長、川崎市麻生区）によると、自動車用ターボチャージャーの市場規模は、2021年の118億ドル（約1兆7千億円）から26年には192億ドル（約2兆8千億円）に膨らむ見通し。電動化が進む一方で、耐久性や積載効率が求められる商用車はエンジンがなお主力との見方もあり、エンジンの小型化や低燃費化が可能なターボの需要は底堅い。同社としては、こうした需要を世界で取り込むとともに、ターボ部品の内製化率を高め、収益基盤の強化にもつなげる考えだ。